## 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

法華経とプラーナ: 対比の視点をうるために

伊原, 照蓮

https://doi.org/10.15017/2328607

出版情報:哲學年報. 41, pp.23-41, 1982-03-31. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

# 法華経とプラーナ

# ---対比の視点をうるために---

## i

伊

原

照

蓮

## 一、はじめに

大要次のようにいう。①過度の誇張、②特に経典の中でその経典を自讃すること、この二点は全ての大乗経典にとっ うな観点から両者を対比するのかが先ず問われなければならない。 たらしてみたい、と思うのであるが、両者を対比して類似点を挙げるのみでは、いまの場合不充分であろう。どのよ ラーナの精神(der Geist der Purāṇas)であると。ことでかれが「プラーナの精神」といっているものが何を指す ての特色である。諸プラーナにとっての特色であるのと同様である。法華経の一行一行から思い起されるものは、プ ヴィンテルニツはその著『インド文学史』第二巻で、法華経とプラーナとの間に並行関係のあることを指摘して、 明確ではない。法華経とプラーナとの両者に共通の雰囲気を感じた筆者としては、その点をより明確な理解にも

とを比較する場合の視点をうることが小稿の意図である。 この点について幸い、先学にすぐれた指摘がある。そこでこれらを紹介し、若干の検討を加え、法華経とプラーナ

の成立と見なされているからである。またプラーナは、ヴィシュヌ・プラーナを主として依用する。 なおここでは法華経の中の、方便品第二から授学無学人記品第九まで、をとり上げる。初期(西暦五○年頃どろ)

右の意図を果たすために参照されるべき先学の研究の中、若干のものは既に紹介されている。そこでそれ以外のも(m)

二四

然たるプラーナ文学の系統であると。(☆) と述べているからである。问法華経の中の、大通智勝如来の十六王子出家物語、日月燈明如来の八王子出家物語は、 る罪障消滅し、子孫も共に来世は天に昇る大益を得べし」としばしばいわれているし、ラーマーヤナ第一節の終りに は、マハーバーラタやラーマーヤナ等と軌を一にする。マハーバーラタでは、「この生命ある聖典を読むものはあらゆ とも何等かの関係があったことを考えさせられる、 として次の 諸点を挙げる。 イイ法華経の中の 大乗経典自讃の長文 マハーバーラタの中に見える五王子の出家物語と、根柢を一にする。ハ父子関係、出生物語、荘厳国土創造、等は純 のを本稿ではとり上げることにする。 ァイシュヤ族これを読めば商利を得ることができ、シュードラ族これを読誦するのを聞けば、向上の利益を得る。」 「バラモン族これを読めば学識と弁才とを得ることができ、クシャトリヤ族これを読めば国王となることができ、ヴ 先ず吉田龍英氏はその著『法華経研究』第三篇法華経発達史の中で、インド文学と法華経との間に、直接的でなくま

例えば譬喩品第三の一〇六偈では次のようにいう。 右の中ſイは、ヴィンテルニツも指摘しているところである。法華経においては確かに、経典自身を自讃している。

(sūtra、法華経) を頭におしいただくならば、そのひとこそ不退転の(avivartika)ひとと汝は思うべし。」(も) 「汝(舎利弗)が説いた時、誰かが 『私は随喜します (anumodayāmi)」ということばを口にし、 またこの経典

華経を誹謗し(kṣipitva)、比丘たちに対して苛酷な行為(khilāni)をなすひとはさまざまな果報を受ける。例えば、 このように、法華経に随喜し、この経典を頭におしいただくひとは、不退転のひと、とされるが、これに反して、法

まざまに説かれている。 が、ヴィシュヌ・プラーナにおいても、 その末尾において、 ヴィシュヌ・プラーナ聴聞(saṃśravaṇa)の効果がさ いうことができよう。これに対比さるべき、マハーバーラタやラーマーヤナの文は、既に吉田氏の示すところである が事とまかに描かれている。(以上、譬喩品、一一三偈より一三五偈まで)。誹謗の罪の強調は、 阿鼻地獄(avīc)に落ち、更に転生しては、畜生に生れ、みじめな生活を送る。その生活がいかにみじめであるか、 自讃の裏返えしと

れる。」 (8,12c-d) 「これ(=parāśara 仙が説いたプラーナ)を聞けば、全ての過失(doṣa)より生ずる、罪(pāpa) の集積は償わ

ラーナ)を聞けば得るのである。上人(=maitreya)よ。」(8,28) 「馬祠祭(aśvamedha) の終りに水浴するひとが 獲得する果報 (phala)、その全てを、これ (=ヴィシュヌ・プ

「禁欲をなしているひと(kṛta-upavāsa)が、これ(=ヴィシュヌ・プラーナ)を聞けば、直ちに、アグニホート

ヴィシュヌ・プラーナを聴聞すれば、全ての罪は償われ、馬祠祭を行った時と等しい果報、アグニホートラ祭を一年 ラ祭(agni-hotra)を一年間実行した時に得られる果報、それを獲得するのである。」(8,29c-d,30a-b)

が、より具体的な検討が望まれる。 間執行した際と同等の果報が得られる、というのである。これは経典の自讃といってよい。ここに、法華経と叙事詩 • プラーナとの間の共通点を見出すことができる。吉田氏の挙げる他の二点(上掲印とパ)も示唆に富む指摘である

### \_

ンガ王朝下の仏教はヴィシュヌ派(vaiṣṇava)と多くの共通点を有する、という。ラモットの所論の大綱は次の如く 次に、 ラモット (É.Lamotte) はその大著『インド仏教史 (Histoire du Bouddhisme Indien.) 』の中で、シュ

dāna 等から五個所の関係文章を挙げる。(10) 王を降した。二度に亘るギリシャ人の侵入は、かれの王座を高めることを危うくした。外敵の中の不和によって危険 は、プシュヤミトラ王を仏教の迫害者とする傳承がある、としてラモットは、 ったことは確実である。しかしかれが仏教徒を迫害したという点については、それ程確実ではない。但し仏教の中に から解放されたかれは、この成功を祝って二回馬祠祭を挙行した。平和は恢復され、プシュヤミトラ王は、旧来のヴ bṛhadratha 王を襲ってその権力を奪い、旧体制に忠誠を誓っていた、 隣国ヴィダルバ (vidarbha) の王 yajñasena である。シュンガ王朝の開祖 puṣyamitra 王(紀元前一八七——一五一)は、 ェーダの祭式を尊重し、バラモンたちの支持を受けて国を統治した。このプシュヤミトラ王が仏教徒に好意的でなか 大毘婆娑論第百二十五、 その前のマウルヤ王朝の最後の王 Divya-ava-

われる箇所を筆者の理解に従って記してみると次の如くである。 次いでラモットは、節を改めて、ヴィシュヌ信仰の隆盛によって仏教に危難が及んだことを述べる。いま必要と思

夕派(bhāgavata)と呼称せられるのである。 (こ) せられる。またクリシュナはナーラーヤナ(nārāyaṇa)ともいわれる。このクリシュナ・ヴァースデーヴァ、或はナ た。英雄クリシュナの父はヴァースデーヴァ(vāsudeva)とよばれ、従ってクリシュナは時にヴァースデーヴァと称 ーラーヤナは更にバガヴァット(bhagavat 神)とも同一視せられる。 それ故この神格の信奉者たちは、バーガヴァ マトゥラーの附近で生れた 英雄クリシュナ(kṛṣṇa)は後に、 古代からの神格ヴィシュヌと同一視せられるに至っ

スデーヴァ(vasudeva)、また同朝の第三代はナーラーヤナとよばれるからである。 は、bhāgavata (或は bhāga) という名前を有するし、シュンガ王朝を継ぐカーンヴァ (kāṇva) 王朝の初代はヴァ いまシュンガ王朝に眼を転ずると、 このバーガヴァタ派と関係のある王名が眼につく。 シュンガ王朝第九代の王

シュンガ王朝興起の頃には、ヴィシュヌ信仰は既に中インドに及んでいた。マウルヤ王朝下に首都パータリプトラ

を傍証する。 るからである。またラクノウ博物館のバララーマ(balarāma)像、カルカッタ博物館のヘラクレス像、等は右のこと(1m) に駐在した大使メガステネースは、クリシュナがマトゥラー附近のひとびとによって信仰されていたことを傳えてい

の中で、ヴィシュヌ信仰にしばしば言及している。 シュンガ王朝初代の puṣyamitra と同時代の文典家パタンジャリ(patañjali)は、その著大注釈書(mahābhāṣya)

- | samkarṣaṇa を伴えるクリシュナ」という表現を含む詩句をパタンジャリは引用している。
- るグループを暗示している。 縁関係にある saṃkarṣaṇa, pradyumna, aniruddha と共に一族をなすが、右の句は、クリシュナを中心としたかか 「これに反し、janārdana は第四番目に外ならない。」という句をパタンジャリは挙げる。クリシュナは、親(コハ)
- 劇が上演されていたことを、パタンジャリの挙げる用例からわれわれは知ることができる。(IO) ラーマ (balarāma か saṃkarṣaṇa) とケーシャヴァ (keṣava) (即ち、kṛṣṇa-viṣṇu) との神殿において音楽
- は記している。 ヴァースデーヴァによる悪王 kamsa の殺害を演ずる俳優及び劇が、かれの時代に存したことをパタンジャリ

ド東海岸地方及びデカン高原にまで及んでいた。とのことは各種の碑文より知ることができる。 またシュンガ王朝の時代に、ヴィシュヌ信仰は、その発祥の地 vidiśā 及び mathurā にとどまることなく、

ヴァ神(ヴィシュヌ神)のための記念柱を建てた。この柱はその頭部には garuḍa 鳥をいただき、またそこには、ヴ 派遣された。とのヘリオドーロスは、バーガヴァタ派の信者であり、 vidiśā (現在の besnagar) に、ヴァースデー の王アンタリキタ(antalikita=antialcidas、凡そ紀元前一二五—一〇〇)によって、 シュンガ王の宮廷に大使として (1)シュンガ王朝第五代の王 bhāgabhadra の治世の第十四年に、ギリシャ人へリオドーロスは、 タキシラ(taxila)

- tyāga と勤勉 apramāda——が大切であることがしるされている。 ァースデーヴァ神を「諸神中の最高神(devadeva)」とし、不死の三原則(trini amutapadāni)—自制 damaと捨離
- (gotamī の息子)は、常に vidiśā に在って、ヴァースデーヴァの大神殿の近くに、第二の garuḍa 柱を建てた。 シュンガ王朝第九代の王 bhāga(或はbhāgavata)の治世の第十二年に、一人のバーガヴァタ派の信者
- prākāra) が建てられているが、そこにも saṃkarṣaṇa 及び vāsudeva のため、ということがしるされている。 (訓) 右より少し後に、 ghasundī (rājpūtana 地方の chitorgarh 地区) において、供養石板の囲い壁 (pūjāśilā-
- 時代人——の治下にあって、morā(マトゥラー郊外)において石板神殿(śailadevagṭha)の中に、聖なる vṛṣṇi 族 マトゥラーの大総督(satrap)śoḍāsa——恐らくはサカ族の王 azilises (紀元前一〇年——紀元後五年)と同
- らかに baladeva, akrūra, anādhṛṣṭi, sāraṇa, vidūratha に関係がある、とラモットはいう。 の五英雄の像(bhagavatāṃ vṛṣṇīnāṃ pañcavīrāṇāṃ pratimāḥ)が建てられた。とのヴィシュヌの五英雄とは、
- 憐みをいだき、大総督 śoḍāsa に恵みを示されるように願って、である。(『玉) よって塔門(toraṇa)と欄楯(vedikā)が作られた。これは、これらを奉献することによってヴァースデーヴァ神が 右と同じ時代に同一地方において、ヴァースデーヴァ神の大神殿が建てられ、 その中に、 vasu というひとに
- samkarsana と vāsudeva とを挙げて、祈願している。 カン王 śātakarṇi 一世(凡そ紀元前二七年—一七年)の妃——が、indra と varuṇa というヴェーダの神と並んで、 北部 mahārāṣtra 地方の nānāghāṭ にある大窟院には碑文が残っているが、それでは、王妃 nāyanikā ——デ

と捨離 tyāga と動勉 apramāda の三徳目がしるされていることは既に述べた。との三徳目の重要性はマハーバーラ ヴィシュヌ派で説く徳目に通じていた、とみることができる。ヘリオドーロスの建てた garuḍa 柱には、自制 上述のヴィシュヌ派の信者たち、また時代を等しくしヴィシュヌ信仰に言及している文典家パタンジャリは

タの中でも強調されている。即ち、

バラモンたちは、これらを真実への門(satyamukha)という。」(五、四三、一四)(lt) 「自制(dama)と捨離(tyāga)と勤勉(apramāda)。不死(amṛta)は、これらの中に包まれている。 賢明なる

とれらの徳目は、ブラフマンの世界に行くための駿馬にも譬えられる。

「勇気(vikrama)も、財産(artha)も、友人(mitra)も、善人(suhṛjjana)も、堅固に制御された自己

(ātman)のようには、苦から解放することはない。」(一一、七、一八)

「それ故に、徳行(śīla)を守ってから、 同情(maitra)に赴くべし。 バラタ族のひと(dhṛtarāṣṭra 王)よ。自

制(dama)と捨離(tyāga)と勤勉(apramāda)との、これら三つは、ブラフマンへの駿馬である。」(同上、一九) 「徳行に綱で結びつけられた車 ――心の ――に乗ったひとは、 死の恐怖を捨てて、 ブラフマンの世界に行く。王

よ。」(同上、二〇)

知らないことはないようだ。というのは、マハーバーラタ第十二巻では、四現相説の素材ともいうべき思想が散説さ 更にラモットは次のようにいう。紀元前二世紀のバーガヴァタ派のひとびとはヴィシュヌの四現相(vyūha)説を 以上によって紀元前二世紀には、ヴィシュヌ派の道徳的教説が広く知られていたことをうかがい知ることができる

Bhagavadgītā (16,1-3) にも多数の徳目が挙げられているが、自制 dama と捨離 tyāga はその中にも含まれている。

れているからである。即ち、先ずヴァースデーヴァからサンカルシャナ以下が創出されることを述べていう。 「私は独りで知(vidyā)を伴って、(世界を)放散させる。 ユディシュティラ王よ。それから更に、私は全世界

を知によってことに作り出す。」(一二、三二六、六七)

シャ)は、サンカルシャナと呼ばれる。かれ(サンカルシャナ)は、プラデュムナを生んだ。」(同上、六八) 「われらの、第四番目の形(mūrti)(= vāsudeva)は、不変のシェーシャ(śeṣa)を放出した。 (=シェー

り生じた。」(同上、六九) る。アニルッダから同様にブラフマンが(生じた)。(ブラフマンは)そこ(アニルッダ)における第一の蓮華よ 「プラデュムナから私アニルッダが(生じた)。 私の創出(sarga)は繰り返えし繰り返えし(行われるの)であ

り返えされる、かかる創出(sṛṣṭi)を汝は知れ。」(同上、七〇)(wō) 「ブラフマンから、一切の存在物-――動くもの及び不動のもの――が(生じた)。 劫(kalpa)の始めにおいて繰

ことでは、ヴァースデーヴァ─→サンカルシャナ─→プラデュムナ─→アニルッダ─→ブラフマン、という創出の順

序が語られているわけである。

現相(tri-vyūha)を、また時に四現相(catur-vyūha)を、とることを説いている。 同じく第十二巻の別の箇所では、ハリ神が、 時に一現相(eka-vyūha)を、時に二現相(dvi-vyūha)を、時に三

喜ぶ。」(一二、三三六、五二) 「またかかる(古来の)法の知――行為とよく結合し、不殺生の法を伴った(知)――によって自在なるハリ神は

え上げられることあり、また四現相が認められることがある。」(同上、五三)(川) 「(ハリ神は)一現相に分類されることあり、或る時には二現相の名前でよばれることあり、また三現相として数

また同じく第十二巻の他の箇所では、サンカルシャナ以下が占める役割――宇宙の規模における――を述べて次の

を含めて――は存しない。偉大な力を有するヴァースデーヴァは全存在の本体となっているものだからである。」 (二二、三二六、三二) 「かの唯一のプルシャ、即ち永遠のヴァースデーヴァ、以外には、世界には常住な存在――不動のもの、

「地(pṛthivī)、風(vāyu)、 虚空(ākāśa)、水(āp)、及び第五番目の火(jyotis)。これらが集合したもの

偉大者の≪身体 Śarīra≫と名付けられるのである。」(同上、三二)

バラモンよ、諸要素が推進力となることはない。」(同上、三四) 「(上記五種の) 要素の集合(dhātu-saṃghāta) なしには、身体は全く成り立たない。また霊魂 (jīva) なしには、

は、従って、それ自体の行為によっては、サナトゥクマーラ(sanatkumāra)となりうるのである。」(同上、三 「その霊魂(jīva)は、シェーシャ(śeṣa)、或はサンカルシャナとよばれる主(prabhu)なのである。その霊魂

「また宇宙破滅の時に、全存在が還滅するところ、それは全存在の意(manas)であり、プラデュムナと広くいわ

五

れている。」(同上、三六)

為において顕現しているものである。」(同上、三七) ものは)行為者、結果、原因である。その意から生れたものがアニルッダである。かれは支配者であり、全ての行 「それから、不動のもの、動くものを含む、一切世界が生ずる、元のものが、その意から生れる。 (そこに生れた

あり、尊者サンカルシャナという主(prabhu)である、と知らるべきである。」(同上、三八) 「知田(kṣetra-jña)であり、グナ(guna)より成らない、尊者ヴァースデーヴァ、かれこそは、霊魂 (jīva) や

ら生じたアニルッダ、かれは我慢(ahaṃkāra)なる大自在者である。」(同上、三九) 「またサンカルシャナから、意(manas)となるものが生ずる。かれはプラデュムナといわれる。 プラデュムナか

世界が生ずるのである。ナーラダよ。」(同上、四〇) 「私から、不動のもの、動くもの、不滅のもの(akṣara)、滅するもの、存在するもの、非存在のもの、を含む全

ナ(guṇa)所成ではない。その身体(śarīra)は、地・風・虚空・水・火の要素の集合より成る。身体が推進力とな ここで述べていることは次の如くである。ヴァースデーヴァは全存在の本体であり、 知田 (kṣetrajña) であり、グ

あると。 CirlinD るためには、その身体に霊魂(jīva)がなければならない。全存在には意(manas)が存在する。 その意から我慢 (ahaṃkāra) が生ずる。 ことでいう霊魂はサンカルシャナであり、 意はプラデュムナであり、 我慢はアニルッダで

プラデュムナは意(manas)であり、第四のアニルッダは我慢(ahankāra)である、 とするのである。 また現相 デーヴァから始まる創出(sarga)の順序が先ず語られ、その中第二のサンカルシャナは霊魂(jīva)であり、第三の 以上マハーバーラタ第十二巻に散説されている、四現相説に関係ある箇所を訳出して示した。ここでは、ヴァース

(vyūha) の語が用いられていることも上述の通りである。

まとまった形で説かれているわけではないが、その素材ともなるべき考えが、上述の如くほぼ出揃っているとみるこ ういう過程を経て、現相(vyūha)説が成立するに至ったということができよう。マハーバーラタでは、四現相説が ーヴァと同一視せられるに及んで、サンカルシャナ以下もまた、宇宙創造の経過の中に位置ずけられるに至った。そ ところでサンカルシャナ以下は、本来は英雄クリシュナの一族の名前に外ならない。英雄クリシュナがヴァースデ

う、というのである。この推測は我々を首肯せしめるように思われる。 以上のような状況をふまえた上で、ラモットは、紀元前二世紀のバーガヴァタ派で四現相説が知られていたであろ

己の中に全存在を見出す、という仕方で努力をする。その場合、yoga は欠くべからざる手段であるが、しかし yoga 己自身の中に神的存在を発見するために、外界から遠ざかる。神と魂との一致、全存在の中に自己を見出す、 着の対象とされる。この愛着はやがて全き献身(bhakti)へと発展する。バーガヴァタ信仰の達人は、専念して、自 英雄は、ヴィシュヌ神と同一視せられ、先ずその部族のひとびとから、次いでヴィシュヌ派の信者たちから、その愛 次いでラモットは、ヴィシュヌ信仰の特色を挙げて大要次の如くいう。上記のような、クリシュナの一族である諸 また自

次の如くである。

る。 が唯一の救済手段であるのではない。 の化身(avatāra)は、数は決定できないが、主要なものとしては十種が挙げられる。 その十種の中には、 神は絶えず世界のために働き、危険が切迫した時には、動物・人間・英雄・神に化身してひとびとを助ける。そ 神、いまの場合ヴィシュヌ神、 はその思恵 (prasāda) によって信者を助け

ー生れの、ヤーダヴァ(yādava)族のクリシュナも含まれていると。

とろからうかがい知ることができよう。 かなり隆盛であり、 以上ラモットの叙述に従ってシュンガ王朝のヴィシュヌ信仰の状況を述べた。確かにその時代にヴィシュヌ信仰が 神殿も建てられ、有力な信者もあり、道徳説、教理が整えられてきていることは、既に述べたと

次の二点を指摘する。 さて以上のようなヴィシュヌ信仰に対して仏教はどういう態度をとったか。この点に関してラモットは、大別して

この点から、有神論を破する、というようなことも後には行われる。 ヴィシュヌ信仰のような有神論は無益であり、むしろ危険である、とする態度である。仏教は無我説であるから

B 右の中、 はよき隣人の関係が存する。両宗教の間には多数の共通点がある。 理論的な面では、上記のように、仏教とヴィシュヌ信仰とは相対立するのであるが、にも拘わらず、両者の間に Aは小稿の目的にいま直ちには関係がないので、ととでは省略する。次にBに関してラモットの挙げる例は(line)

先ず ahiṃsā が両宗教において共に重視されている。

きる。との過去諸仏の観念とは、 次にヴィシュヌ信仰の方でいう avatāra の教理は、 例えば次の経典に認められるが如きものである。 Mahāpadāna Suttanta では過去 仏教の方の過去諸仏の観念の中に、その複本を見出すことがで

七仏についていう。

く同じ賢劫においてであると。 した。この同じ賢劫において迦葉(kassapa)尊者が世に出現した。 私がいま世に生れて等正覚を成じたのも、正し において拘樓孫(kakusandha)尊者が世に出現した。この同じ賢劫において拘那含(konāgamana)尊者が世に出現 に出現した。その同じ第三十一劫の時に毘舎婆(vessabhu)尊者が世に出現した。この現在の賢劫(bhadda-kappa) 過去九十一劫(kappa)の時に毘婆尸(vipassi)尊者が世に出現した。過去三十一劫の時に尸棄(sikhi)尊者が世

覚りを開いた樹木の名前、各尊者の二大弟子の名前、父母の名、誕生地等が述べられる。(lit) 次いでこれら七尊者それぞれについて、種姓(jāti,social rank)、姓(gotta,family)、その時代の人寿、その下で

右はこの Suttanta の最初の部分であるが、ここに見られるような過去仏は Bhārhut と Sāñcī の古い彫刻にも示

とは Mathurā Lion Capital の銘文より知ることができる。 この大衆部の中の有力な一派、説出世部(lokottara-よって少くとも促進せられたと考えられ、その意味でヴィシュヌ派の教理の影響を無視することはできないと。 タ派の信者たちがそれぞれ好みの神格に対して献身的信仰を捧げていた。説出世部の主張がこのような信仰の風土に vādin)が、仏陀の超越性を強調したことは周知の通りである。 śaurasena 或は avanti 地方において、バーガヴァ ラモットは更に続いていう。ヴィシュヌ信仰の聖地マトゥラーには大衆部(mahāsāṃgika)が紀元前に存在したと

現われを、非常にしばしば vyūha という語でよんでいる。とれは、ヴィシュヌ信仰との関わりがあったことの徴候(gill) (九、二九)に示されているナーラーヤナ(nārāyaṇa)の兄弟である。 また法華経では、仏陀の活動のさまざまな(gl) 法華経では、仏陀は全ての有情に対して公平無私に同一の配慮を表わすが、かかる仏陀は、バガヴァッド・ギータ

引き続いてラモットは、インドの有神論が大乗仏教徒の上に及ぼした影響について指摘する。

であると。(四三)

以上が、法華経とヴィシュヌ信仰との関係について、 ラモットの指摘するところである。

## 四、おわりに

述べた。また筆者の依用するヴィシュヌ・プラーナはヴィシュヌ教徒にとっての聖典であり、初期のプラーナ文献 とが可能である。このことは、法華経とヴィシュヌ・プラーナとの間の共通点、類似点を探ねる場合、大切な視点を 華経とプラーナ――特にヴィシュヌ・プラーナ――との間には、共通の信仰の土壌、共通の宗教的風土を予想するこ れわれは知ることができる。法華経も、少くともその第九品までは、ほぼ同時代の成立と見なされていることは既に ゥラーを中心としたかなり広い範囲にわたってヴィシュヌ信仰が盛んであったことを、かれの示すところによってわ 一つと目されるものである。さらに、初期のプラーナは、紀元一世紀には存在したにちがいない、とされている。(四四) 以上両先学の見解について述べた。この中ラモットの指摘するところはいまの場合重要である。紀元前后にはマト

### ì

与えてくれる。

- (|) M.Winternitz, Geschichte der indischen Literatur. Bd.2.235-6
- この箇所は、金倉博士によって既に指摘されて**いる**。 金倉圓照博士「インド文化と法華経の交渉(序説)」(『法華経の思想と文化』所収)二二頁以下参照。
- (二)横超慧日博士『法華経序説』(法蔵館)七二頁以下。田村芳朗博士『法華経』(中公新書)四三頁以下。
- (III) Vishņupurāņa, with the commentary of Śrīdharasvāmi. Calcutta, 1882.
- (英訳) H.H. Wilson, The Vishņu Purāṇa. 3rd edition, Calcutta, 1961
- 回 金倉博士、上掲論文、にはビュルヌフ、ケルン両碩学の見解が詳細に、且批判を加えながら、 紹介されている。

- (五)吉田龍英氏『法華経研究』青梧堂、昭和十六年。本書は、中村瑞隆博士の御好意によって、知ることができた。
- (六) 吉田氏は、この外、ケルンの指摘(法華経と Bhagavadgītā との類似)を紹介している(全書一九四頁以下)が、これは 金倉博士がより正確に紹介しているところである。注(一)に示した論文をみよ。
- (八) śrute 'smin sarvadoṣa-uttha-pāpa-rāśiḥ praśāmyati// (8,12c-d) (七)サンスクリット・テキストはケルン・南條本による。
- yad-aśvamedha-avabhrthe snātah prāpnoti vai phalam/

kṛta-upavāsaḥ prāpnoti tad-asya śravaṇa-antaraḥ/

sakalam tad-avāpnoti śrutvā-etan-munisattama// (8,28)

yad-agnihotre suhute varsena-āpnoti vai phalam∥ (8,29 c-d,30 a-b)

(九) N.N.Ghosh, Did Puṣyamitra Śuṅga persecute the Buddhists?, B.C. Law Volume, I, Calcutta, 1945 右の論文では、この問題が検討されているとのことである。H. Raychaudhuri も、仏教の迫害という傳説には反対してい

る。金倉博士『印度中世精神史 中』五頁、註(三)を参照。

- (一〇)ラモットの挙げる資料は、⑴大毘婆娑論百二十五、⑵ Divya-avadāna、⑶舎利弗問経、⑷ Mañjuśrīmūlakalpa、⑸ター ラナータ仏教史、からの関係箇所である。との中、①②③は、山田龍城博士によって詳細に検討されている。 『大乗佛教成 立論序説』五三三頁以下。
- ( | | ) Histoire. p.431 ff.
- (一二)バーガヴァタ派については、辻直四郎博士『バガヴァッド・ギーター』(インド古典叢書、講談社) 三一五頁以下を参看せ
- (一三)シュンガ王朝興起は紀元前二世紀前半。金倉博士、上掲書(注九参照)一頁をみよ。
- (一四)辻博士、上掲書(注一二参照)三一九頁をみよ。
- (一五)強力なるラーマ、の意。かれは時にヴィシュヌの第八の化身とせられる。
- (一六) Histoire. p.432
- (一十) asidvitīyo 'nusasāra pāṇḍavam/

saṃkarṣaṇadvitīyasya balaṃ kṛṣṇasya vardhatām-iti// (ad 2 , 2 ,24; Kielhorn's edition. I. p.426.)

「剣を持って、かれはパーンダヴァを追跡した。 saṃkarṣaṇa を伴えるクリシュナの力が増大してよかし。」

これらの偈の出所不明

J.A.F.Roodbergen, Vyākaraņa-Mahābhāṣya. Poona 1974.p.89. footnote 354.

なおsaṃkarṣaṇaは 時にクリシュナの兄とせられる。PW. saṃkarṣaṇa の項をみよ。

(기록) janārdanas-tv-ātmacaturtha eva/ (ad 6,3,5; Kielhorn's edition.3. p.143.) janārdana は「ひとびとを刺戟する者、困惑させる者」の意味で、ヴィシュヌ、或はクリシュナの別名(PW. janārdana

に全存在(akhilabhūta)を食いつくす(bhakṣayati)時の相とされている。 世界創造(visṛṣṭi)の時には、ハリ神はブ なお、ヴィシュヌ・プラーナにおいては janārdanaは、一切の支配者ハリ神(viśveśvaro hariḥ)が劫末(kalpānta) ラフマンとなり、創造された世界を保護する時には、ハリ神はヴィシュヌとなるのである。

Vishņupurāņa. op.cit., p.20-21. Wilson. op.cit., p.18.

(一九) saṃkarṣaṇa は時にクリシュナの兄とされることは上述した。注(一七)参照。pradyumna は時にクリシュナの子、或は 時に saṃkarṣaṇaの子、とされる。 aniruddha は pradyumna の子とされる。

ヌ)から saṃkarṣaṇa が、saṃkarṣaṇa から pradyumna が、pradyumna より aniruddha が、 ラフマンが生ずる。坂井尚夫教授「宗教」(南方民俗誌叢書、5、『印度』、五○○頁)参照せよ。 なおマハーバーラタ第十二巻では、この saṃkarṣaṇa 等について次のように説く。即ち最高神 vāsudeva(=ヴィシュ aniruddha よりブ

(1|0) mṛdaṅga-śaṅkha-tūṇavaḥ pṛthaṅ-nadanti saṃsadi prāsāde dhanapati-rāma-keśavānām/ (ad 2 , 2 ,34 ;

Kielhorn's edition.1.p.435-436)

「kubera とラーマとケーシャヴァとの神殿における集会において太鼓とほら貝と笛とが個別に演奏される。」 右の語句の出典不明。J.A.F. Roodbergen, Vyākaraṇa-Mahābhāṣya. (op.cit., p.208)

(二一) vārttika 6 ad 3, 1, 26. の箇所で、パタンジャリは kaṃsavadham-ācaṣṭe kaṃsaṃ ghātayati/balibandhamācaste baliṃ bandhayati\の例を挙げる。 この例文は次のような意味である。即ち、物語り(ākhyāna)を述べる動詞

kamsa を殺害せしめる)という表現は、kamsavadham-ācaste\(悪王 kamsa の殺害をかれは物語る)ということを表 が causative form をとる時は、その意味は「それを物語る。」ととを表わす。従って、kaṃsaṃ ghātayati\(悪王 わす。balim bandhayati\(bali を捕縛せしめる)という表現の場合も同様である。

更に vārttika 15 (ad 3 , 1 ,26) の箇所では、kaṃsa の殺害及び bali の捕縛が、俳優(śobhanika)によって演ぜら

- (二二)ベスナガルの garuḍa pillar については、金倉博士『中世精神史 中』九頁、及び辻博士『バガヴァッド・ギーター』(上掲) れ、また絵画(citra)に描かれていたことをうかがわせる表現がある。辻博士、上掲書(注一二参照)三二〇頁をみよ。
- 一九七八、三五頁)に挙げられている。またこの銘文と関係のある、 仏教の『ダンマパダ』のうちの句も全論文に示されて 川一○頁参照。なお E.J.Rapson, The Cambridge History of India. Vol. I. plate XVIII. 参照。 ベスナガルの石柱銘文は中村元博士 「佛教隆盛時代におけるヒンドゥー信仰の実情」(鈴木学術財団、研究年報、一五、
- (二三)との碑文は、その書体よりみて、少くとも紀元前二百年のものであり、従ってまた patañjali 以前である。 R.G.Bhandarkar, Vaisnavism, Saivism and minor religious systems. §,3.
- (二四)通常は、baladeva はクリシュナの兄、akrūra はクリシュナの父方の叔父、anādhṛṣti はクリシュナの属している yādava族の将軍 ugrasena の息子、sāraṇa はクリシュナの兄弟、vidūrathaはvṛṣṇi 族の或るひと(Vishṇu-purāṇa, op. cit., p. 348. によれば、bhajamāna の息子)を指す、とされる。
- (二五) との刻銘については、中村博士、上掲論文 (三六頁) において、原文が示され、検討が加えられている。
- (川代) Bhandarkar, op.cit., p.4.
- (川中) damas-tyāgo 'pramādaś-ca eteṣv-amṛtam-āhitam/ P.Deussen, Vier Philosophische Texte des Mahābhāratam. S.13 tāni satyamukhāny-āhur-brāhmaṇā ye manīsiṇaḥ/ (5,43,14) (Poona edition)
- (川人) na vikramo na ca-apy-artho na mitram na suhrjjanah/ damas-tyāgo 'pramādaś-ca te trayo brahmaņo hayāḥ// (op.cit,, 19) tasmān-maitram samāsthāya śīlam-āpadya bhārata, tathā-unmocayate duḥkhād-yathā-ātmā sthirasaṃyamaḥ// (11, 7, 18)

śīla-raśmi-samāyukte sthito yo mānase rathe/

(二九)但し、マハーバーラタは全体としては、前二世紀――後二世紀の成立とされ、その中で、いまの第十二巻は、 tyaktvā mṛtyu-bhayam rājan-brahmalokam sa gacchati// (op.cit.,20) (Poonas edition) とされていることからも知られる通り、新らしい部分に属することは 留意しておく必要がある。 金倉博士 P.Ch.Roy, The Mahābhārata. Vol.VII. p.32 『印度中世精神 pseudo epic

史上』三〇一頁、及び三〇二頁の注(四)参照。

(IIIO) ekākī vidyayā sārdhaṃ viharişye dvija-uttama/ ここに述べられている、samkarṣaṇa 以下の創造については、坂井教授によって既に紹介されている。注(一九)参照。 etām sṛṣṭim vijānīhi kalpādiṣu punaḥ punaḥ// (op.cit.,70) brahmaṇaḥ sarvabhūtāni carāṇi sthāvarāṇi ca/ aniruddhāt-tathā brahmā tatra-ādikamala-udbhavaḥ// (op'cit, 69) pradyumnād-aniruddho 'ham sargo mama punah punah/ sa hi saṃkarṣaṇaḥ proktaḥ pradyumnaṃ so 'pyajījanat// (op.cit.,68) asman-mūrtiś-caturthī yā sā-asrjac-cheşam-avyayam/ tato bhūyo jagat-sarvam karişyāmi-iha vidyayā// (12,326,67) 所収、昭和五十五年二月)をみよ。 また、ブラフマンが蓮華生である点については、塚本啓祥博士「蓮華生・蓮華座の源流と展開」(『法華経の思想と基盤』

(II||) dharma-jñānena ca-etena suprayuktena karmaṇā/ て創出することであり、四現相とは、 これに更にアニルッダが 加わって、 四神の相をとって 創出を実行することである。 tri-vyūhaś-ca-api saṃkhyātaś-catur-vyūhaś-ca dṛśyate// (op.cit.,53) eka-vyūha-vibhāgo vā kvacid-dvi-vyūha-samjñitah/ ahiṃsā-dharma-yuktena prīyate harir-īśvaraḥ∥ (12,336,52) ルシャナの相をとって創出を行うことであり、 三現相とは、ウァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラデュムナの相をとっ 注釈によれば、一現相とはヴァースデーヴァの相をとって創出を行うことであり、二現相とはヴァースデーヴァ、サンカ

Poona edition;12,336,53 に対する脚注参照。

- (۱۱/۱1) nityam hi na-asti jagati bhūtam sthāvara-jaṅgamam/ akṣaraṃ ca kṣaraṃ ca-eva sac-ca-asac-ca-eva nārada// (op.cit., 40) mattah sarvam sambhavati jagat-sthāvara-jangamam/ pradyumnād-yo 'niruddhas-tu so 'haṃkāro maheśvaraḥ∥ (op.cit., 39) saṃkarṣaṇāc-ca pradyumno manobhūtaḥ sa ucyate/ jñeyaḥ sa eva bhagavāñ-jīvaḥ saṃkarṣaṇaḥ 'prabhuḥ∥ (op.cit., 38) yo vāsudevo bhagavān-kṣetrajño nirguṇātmakaḥ/ so 'niruddhaḥ sa īśāno vyaktiḥ sā sarva-karmasu// (op.cit., 37) yasmāt-sarvam prabhavati jagat-sthāvara-jangamam/ tasmāt-prasūto yaḥ kartā kāryam kāraṇam-eva ca/ sa manaḥ sarvabhūtānāṃ pradyumnaḥ paripaṭhyate// (op.cit., 36) yasmiṃś-ca sarvabhūtāni pralayaṃ yānti saṃkṣaye/ tasmāt-sanatkumāratvam yo labheta svakarmaņā// (op.cit., 35) sa jīvaḥ parisaṃkhyātaḥ śeṣaḥ saṃkarṣaṇaḥ prabhuḥ/ na ca jīvam vinā brahman-dhātavaś-ceṣṭayanty-uta∥ (op.cit.,34) na vinā dhātu-saṃghātaṃ śarīraṃ bhavati kvacit/ te sametā mahātmanaḥ śarīram-iti saṃjñitam//(op.cit., 32) pṛthivī vāyur-ākāśam-āpo jyotiś-ca pañcamam/ sarvabhūta-ātmabhūto hi vāsudevo mahābalaḥ// (12,326,31) rte tam-ekam purusam vāsudevam sanātanam/
- (三三)との三五偈以下で述べるところは、pāncarātra 派の四現相説である。ここでは、jīva=saṃkarṣaṇa;manas= Poona edition, 12,326,35 以下に対する Critical Notes (Fasc. 26,p.2226) 参照。 pradyumna;ahaṃkāra=aniruddha;vāsudeva=kṣetrajña=nirguṇaḥ paramātmanとおれている、という。

- (三四)注(一九)をみよ。
- (川五) Histoire. pp.434-6
- (三六)The Dīgha Nikāya. xiv. (vol.II.p.1ff.) 長阿含経第一、大本経(大正蔵、一、一頁以下)。なお、この経には中亜 本があり、E.Waldschmidt によって出版されている。

Das Mahāvadānasūtra. T.I: Einführung und Sanskrit-Text.

(三七)Dialogues of the Buddha. part II. p.6-7. にこれらが表示されている。

房、五〇頁参照。

(三八)但し、過去仏の信仰は阿育王以前にできていた。 干潟龍祥博士『改訂増補』本生経類の思想史的研究』昭和五十三年、山喜

T.II: Textbearbeitung. Berlin, Akademie-Verlag 1953,1956.

- (四○)大衆部という名称と、説出世部との関係について、静谷氏、上掲書、五三頁以下をみよ。 (三九)Sten Konow, Kharoshthi Inscriptions. XL. なお静谷正雄氏『小乗仏教史の研究』昭和五十三年、百華苑、六○頁参照
- (四一)ととに挙げられている gītā の文と、法華経(薬草喩品の三草二木の鬢喩に見られる、 如来の公平無私)との類似は、既に Kern によって指摘されている。金倉博士「インド文化と法華経の交渉(序説)」(上掲)一八頁参看。
- (凹川) p.117.1.2; p.146.1.12; p.209.1.1; p.219.1.4; etc.
- (四三)ラモットはこの後、大乗の三身説にも言及している。
- (四四)中野義照博士訳『叙争詩とプラーナ』二二七頁。(この部分は英訳による。)